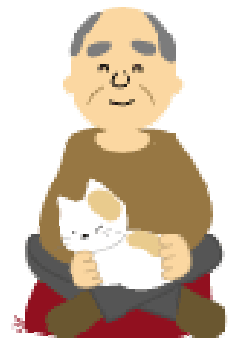


薬剤による排尿障害について

排尿障害は、前立腺肥大症や脳血管障害・パーキンソン病などによる神経因性膀胱が原因疾患として知られていますが、下記のような薬剤が関与している場合もあります。添付文書の副作用に排尿障害（頻尿、尿失禁、排尿困難など）に関する記載がある薬剤は、慢性疾患に用いられている薬剤など約400成分あり、その中には、排尿障害の治療に用いられる薬剤も含まれています。

尿の排泄に関わる機能は、尿をためる「蓄尿」と尿を出す「排出」に分けられます。これらは、“「蓄尿時」は膀胱排尿筋の弛緩・尿道括約筋の収縮”、“「排出時」は膀胱排尿筋の収縮・尿道括約筋の弛緩”のような相反する生理機能を示します。そのため、頻尿・尿失禁の治療に用いられる抗コリン薬（膀胱収縮抑制作用）が、副作用で排尿困難・尿閉を起こすと言うようなことが生じます。下部尿路閉塞（前立腺肥大症）を伴う男性では特に注意が必要です（一般に抗コリン薬は前立腺肥大症に禁忌とされています）。



【排尿障害を起こしやすい主な薬剤と作用】

◆ 排尿障害（頻尿・尿失禁など）

発生機序：膀胱（排尿筋）が過剰収縮、尿道（括約筋）は弛緩

薬効分類	作用	当院採用薬
催眠・鎮静、抗不安薬	中枢性筋弛緩作用など	ソレントミン ニトラゼパム ハルラック エチゾラム セニラン メイラックス
アルツハイマー型認知症治療薬	アセチルコリンエステラーゼ阻害作用	アリセプトD錠
中枢性筋弛緩薬	外尿道括約筋弛緩作用	ミオリラク リオレサル ダントリウム（末梢性）
前立腺肥大による排尿障害治療薬	α_1 遮断作用	サキオジール ハルナルD錠 フリバス
抗がん薬	膀胱直接刺激作用など	パクリタキセル リュープリン
狭心症治療薬	尿道平滑筋直接弛緩作用	ニトロペン
抗うつ薬	意識レベルを低下させるため	デプロメール トレドミン

◆ 排出障害（排尿障害。尿閉など）

発生機序：膀胱（排尿筋）は弛緩、尿道（括約筋）が狭窄

薬効分類	作用	当院採用薬
鎮痙薬	抗コリン作用	ソセゴン注 レペタン注
消化性潰瘍薬		ストマチジン ファルジン
抗不整脈薬		タイリンダーR シベノール メトレキシジン
抗アレルギー薬		ゼスラン セチリジン塩酸塩錠
三環系抗うつ薬		イミドール アナフラニール ノーマルン アモキサソ
抗精神病薬		レモナミン、リントン リスペリドン
		セロクエル

		コントミン ニューレプチル インプロメン スルピリド
頻尿・尿失禁治療薬		塩酸プロピペリン錠 ハルニンコーワ
抗パーキンソン薬	抗コリン作用、 α_1 刺激作用など	ドパコール マドパー 塩酸セレギリン錠 ストブラン アキネトン ドロキシドパカプセル
中枢性筋弛緩薬	膀胱排尿筋直接弛緩作用	ミオリラク リオレサル ダントリウム
麻薬	オピオイド受容体を介した排尿反射の抑制	塩酸モルヒネ錠・注 MS コンチン リン酸コデイン オピスタン デュロテップパッチ
一般用医薬品（OTC）の総合感冒薬・鼻炎薬、漢方薬、抗アレルギー薬、鎮痙薬、胃腸薬など	エフェドリン類（塩酸プソイドエフェドリン等）を含む薬剤や、麻黄を含む漢方薬	

<上記薬剤で必ずこれらの症状が出るということではありません>

【排尿障害を起こしやすい患者様・疾患】

- 高齢者（加齢に伴い排尿筋。尿道括約筋の低下、関節炎などによりトイレ移動で時間を要す）
- 男性
- 前立腺肥大症
- 脳血管障害、パーキンソン病、糖尿病などによる神経因性膀胱



【正常な排尿の目安】

- 1 回の尿量：約 300mL
- 1 回の排尿時間：約 30 秒
- 1 日の排尿回数：5～6 回

◆ 排出障害による主な症状

分類	主な副作用	主な自覚症状
蓄尿症状	頻尿（昼間・夜間） 尿失禁 尿意切迫感	<ul style="list-style-type: none"> ○ 尿が漏れる（本人の意思に関係なく） ○ 日中のトイレの回数が多すぎる ○ 居室に尿臭がある ○ 夜中にトイレに何回も起きる ○ 尿取りパットの交換が多い ○ トイレが近い ○ 急に尿がしたくなると我慢できない
排出症状	排尿困難 尿閉	<ul style="list-style-type: none"> ○ 尿が出づらい ○ 排尿開始時にいきむことがある ○ 尿が出るまでに時間がかかる ○ 尿に勢いが無い ○ 体がむくむ ○ 尿が途中で途切れる ○ トイレの回数が極端に少ない ○ 尿がまだ残っているような感じがする

※ 上記症状を併せ持つこともある。

- ・ 尿失禁：尿が不随意に（本人の意思に関係なく）漏れる
- ・ 尿意切迫感：急に起こる抑えられないほど強い尿意で、我慢することが困難
- ・ 排尿困難：排尿がスムーズに行われない
- ・ 尿閉：膀胱内に大量の尿がたまっているのに排尿できない

【最近、耳にするようになった言葉】

下部尿路機能障害

2002 年の国際禁制学会で新しく提唱された尿排出の障害を総称する用語で、日本では従来から「排尿障害」と呼ばれています。最近では日本でも、「下部尿路機能障害」を用いるようになってきています（本来「排尿」は尿

貯蓄の意味を持たないため、排尿障害という語句で、尿排泄の障害を包括的に表現することは、臨床現場に混乱を生じさせていました。

過活動膀胱

「下部尿路機能障害」と同様に新しく提唱された病名です。「尿意切迫感を必須とした症状症候群であり、通常は、頻尿と夜間頻尿を伴うものであり、切迫性尿失禁は必須ではない」と定義されています。

引用・参考資料：スズケン情報室発行 TOPIC No.69 (2007.12)